

学戦都市の捕食者

The Susano

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴツドイーター系の作品がないので、作ってみました。
何番煎じな要素もありますが、よろしくお願いします。

目次

第1話	1
第2話	12
第3話	26
閑話 龍弥の新生活	39

第1話

「次に会うのは一か月後だな。いない間に、サボるなよ」

「うん！休みの間に追い抜くんだから、覚悟してね！」

「簡単に負けねえけど、期待しとくぜ」

「ようやく着いたな」

北関東のクレーター湖に浮かぶ、正六角形型のメガフロートに築かれた水上学戦都市「六花」、通称「アスタリスク」。世界中から集まった『星脈世代』^{ジエネステラ}が、6つの学園に所属して「星武祭」^{フエスタ}を競い合う巨大な街である。

その1つ、星導館学園の正門前に、俺——神薙龍弥が校舎を見上げながら呟く。黒髪に黒目、所々に装飾の付いた黒いジャケットとズボン、左手にスーツケース、右手にボストンバッグを持ち、正にここへ着いたばかりと言うような姿だ。

「ようこそ星導館学園へ。神薙龍弥さん」

声のする方に振り向くと、同年代の金髪の美少女が立っていた。正直言って驚きだ。俺みたいな訳アリの人物相手に、学園のトップが来るとは。

「生徒会長が直々に迎ええとはな。クローディア・エンフィールド」

「あなたの場合、人に任せるよりも私の方が適任と判断致しましたから。それでは、学生寮まで案内しますね」

ふんわりとしつつも、落ち着いた雰囲気を持つクローディア。来ることが決定した1年前に会ったきりとはいえ、全く変わっていない点に若干安心する。荷物を引きながら、寮までの道を喋りながら歩く。

「高等部からではなく、中等部3年からの入学で本当に宜しかったのでしょうか？」

「俺の場合、同学年と触れ合う機会が極端に少なかったからな。周囲に慣れる時間が欲

しかっただけだ。それこそ、レヴォルフなら高等部からだったかもな」

「教材を提供したとはいえ、編入試験を最速で全科目満点合格でしたから、学力は問題ありませんからね。ですが、部隊内での人間関係は良好だったので問題ないでしょう？」

「逆に言えば、部隊内で関係が終わってる。外と関わりを持つ以上、避けられる前に慣れておきたい。というか、ロミオから当時のことばつちり聞いてたな？あいつ、今でも星導館にしときゃ良かったって愚痴ってるぞ。」

「……さて、学生寮はこちらですね」

ちよつと赤くなつたクローディアを微笑ましく見ながら、折を見て各学園へ行くことを考える。近々学園祭があるので、日程を調整して会いに行くつもりだ。

そんなことを考えていると、学生寮に到着する。中・高・大学部が集結しているためか、マンシヨン並みにでかい。

「ここが男子寮ですね。普段は相部屋ですが、奇数人なので高等部までは1人での使用になります。明日、書類や制服等を渡すので、先程の門の前にお越しください。」

「了解。始業式は一週間後だったな。こつちも色々準備するさ」

そう言つて寮の鍵を受け取りながらクローディアと別れる。後で同僚全員に連絡するつもりだが、ロミオから質問攻めにされる気を感じながら鍵の番号の部屋に移動する。

約10畳ほどの一室に、備え付けのベッドと机が2つずつ。トイレにシャワーに簡易キッチンなど、ホテルに近い形式の部屋である。

置く場所を迷いながら整理したので、予想以上に時間を取られたが荷解きを終え、しばらく使う日用品の購入に中央区の商業エリアに向かうことにした。なお、事前に貰った地図からある程度のあたりは付けているが、散策も兼ねて適当に歩き回る予定である。

「こんなもんだな。足りない物はその都度補充するか」

ショッピングモールで日用品を買い込むと、そのまま商店街をブラブラと歩き出す。荷物はとある方法で運んでいるので、今は手ぶらだ。

食材も買い込んではいいるが、来て初日ということ以外食にしようかと考えていると

「やだって言うてるでしょ！しつこいなあ」

「なんだよ、連れねえな。ちよつとお茶するだけだつて」

「そーそー。悪いようにはしないからさー。」

路地裏からそんな声が聞こえてきた。

ちらりと見ると、1人の女性が男性2人に絡まれていた。女性は私服だが、男性はレヴォルフの制服である。正直、ここで介入しても下手に恨みを買うだけなので、素通りするつもりだったが、

「あーつと、そこまでにしといた方がいいぞ。それに嫌がる相手に無理やり迫るもんじゃない」

今回に限っては、干渉することにした。

「あつ？なんだよ、お前。関係ないだろうが、引つ込んでろ」

「あんたらより俺もその子も数段強いぞ。ちよつかいかける相手を選べ」

「ハツ！ひよろいお前らが、俺より強いだと？冗談だろ？」

「見た目で弱者と判断してナンパしてる時点で、十分に小物だがな。」

その発言に、馬鹿にした表情の男性の顔がみるみる赤くなっていく。人を煽ることは慣れていても、煽られることには慣れていないようだ。

「言うじゃねえか……！」

「ならかかつてこい。最も、突つかかる時点で——」

「あ、危ない！」

言葉の途中で襲いかかってくる2人。その手にはナイフ状の煌式武装が握られていた。だが、その瞬間に戦闘モードに入った俺には、スローモーションに見えた。

『己の意識に一切の隙を見せるな。常在戦場を身に刻め。油断したものから死ぬだけだ』

そんな師の言葉を思い出しながら、相手の無意識に一瞬で滑り込んで懐に入り、それぞれの鳩尾を左右の拳で打ち抜く。

古武術で『抜き足』と呼ばれる移動方法である。

「がはっ！」

衝撃が体を突き抜けるように放った結果、意識は残ったがダメージで動けなくなる。その体勢で固まった相手の背中に回り込み、そのまま蹴り飛ばす。路地裏から蹴り飛ばすほどの威力になったが、仮にも星脈世代。それに、体格も大きかったので、自然回復できる程度の怪我で済んでいるだろう。

「そもそも、襲い掛かる時点で雑魚決定なんだよな」

そう呟きながら、女性の元に歩く。改めて見ると、結構な美人である。腰まで伸ばした茶髪に整った顔立ち。街中を歩けば見とれる男がいても納得する容姿である。

「えーっと。手を出される前に追い払ったと思いますが、大丈夫ですか？」

「う、うん。大丈夫、助けてくれてありがとう。」

「どういたしまして。あの2人はしばらく動けません、今の内に移動しましょうか。それじゃあ——」

「あ、ちよつと待つて！」

これ以上は面倒になるためにこの場を離れようとする、女性に呼び止められる。

「この後、時間ある？お礼をしたんだけど……」

「いえ、たまたま聞こえて介入しただけです。むしろお節介と思いましたが」

「全然！それに、助けてもらったんだから、相応のお礼はしないと気が済まないから」（こりや、こちらが折れないと話が終わらないな）

即座にそう考えると、ちよつどいい頼みを思いつく。

「とりあえず、移動しながら話しましょうか。同じ人に絡まれるのも厄介ですし」

「うん！私は構わないよ」

という訳で走つて裏路地から脱出し、人の多い通りを選んで進む。移動しながら頼みを聞いてもらうと、近場のためにそのまま案内してもらうことになった。

「でも、いいの？料理店を教えて欲しいだなんて。もつと無茶言われると思つたけど」

「女性の弱みに付け込むほど落ちぶれはしませんよ。それに人に教える以上、ハズレはないでしょうから」

「なら思いつきり期待してもらつていいよ？結構人気店だから」

「それは楽しみです」

そうやって会話していると、料理店に着く。少々女性向けの雰囲気があったが、男性客も少しいるので、総じて若者向けなのだろう。なお、女性の方もせっかくなので食べていくらしい。

若干夕食には早い時間だが、待ち時間が少なかつたために好都合だった。ただ、唯一の誤算を除けばだが。

「まさか、相席する羽目になるとは」

「私もこれは予想外だったよ……」

店側から相席を頼まれたからだ。時間帯の影響か、中・大人数用テーブルしか空席が無く、他の客は家族連れだったため、個人で待つていた2人に相席を頼まれた。色々と出来過ぎたこの状態には、流石に空笑いをする。

「しかし、客やメニューを見るに、本当に期待して良さそうですね」

「えー。信じて無かつたの？ちよつとシヨックだなー。」

「噂よりも実際に見て信じる主義でして。まあ、シルヴィア・リューネハイムの紹介ですから当たりとは思いましたか」

「えっ……!?!」

女性はカルボナーラを、俺は日替わりメニューを注文し、手持ち無沙汰に会話を始め

たのだが、突然漏らした言葉に女性が完全に固まる。その光景に、俺はニヤリと笑う。なお、周囲の喧騒に紛れるように言ったので、他の客にはバレていない。

「や、やだなあ。間違われるのは嬉しいけど、流石に人違いじゃ……」

「まあ、注意しないと全く気付かないでしょうね。私も分かったのは追い払った後ですし」

そう言うと、ばれた理由を列挙していく。

「有名人が外見を変えるのはよくある話です。あなたも髪型や色を変えています。声まで変えられないようですね。それに、立っている姿から強者であることは分かりました」

その程度なら他人の空似で済みますが、と言葉を切ると、一番の理由を告げる。

「決め手はナンパを相手した時の立ち振る舞いです。口説き文句に困惑せず、鬱陶しそうにしている。星武祭関係なら珍しくはありませんが、それにしても慣れ過ぎている対応です。恐らくはアーティスト。ここまで分かれば極少数に絞れます。後は、ばれた時の対応で確信しました。あれ、一応鎌をかけたつもりだったんですよ?」

説明が終わると、ばれたことが結構シヨックだったのか、深くため息をつく女性。ネタばらし程度に考えていたのだが、思った以上のダメージが大きかったようだ。

「バレてたのかー。変装には自信あったんだけどなー」

「……すみません。少々軽率でしたね。ドツキリのつもりだったんですが」

「いいよ。気にしないで。でも、今日あったことは内緒にしてね?」

「承知の上ですよ。被害がどこまで広がるか、検討もつきませんからね」

世界の歌姫との密会。これだけで、場所の特定から嫉妬による奇襲まで容易に想像できる。最悪、彼女の引退沙汰まで考慮する必要が出てくる。

「じゃあ、改めて自己紹介。声には出せないからこれでね?」

そう言つて備え付けのペンと紙ナプキンに名前を書いていく。

シルヴィア・リニューネハイム

それが女性の名前だった。

「ご丁寧にありがとうございます。では、私も習って」
シルヴィアと同じように、紙ナプキンの裏側に名前を書く。

神薙 龍弥

と。

歌姫を助けた通りすがりの新入生。この2人の邂逅がすべての始まりになることを、
誰一人——当事者達ですら知らなかった。

第2話

「それでは、こちらが制服と校章です。決闘などにより破損した場合は支給されますので、申請をお願いしますね」

「ああ」

シルヴィアとの邂逅から翌日、俺はクローディアから制服と校章を受け取っていた。星武祭の他にも、公式序列戦や決闘などによって破損や紛失はかなり多い（勝利条件の1つである校章は特に）ため、どれも申請さえ出せば支給してもらえそうだ。

支給品を受け取って転校生用の配布書類に目を通していると、クローディアが不思議そうな表情を向ける。

「どうした？」

「いえ、どことなく嬉しそうに見えたもので。何かいいことでもありましたか？」

「お勧めの店が見つかったただけだ。初めて行った店が当たりでね」

訳ありで感情表現が極端に少ないのだが、昨日の出来事の影響が表に出たのか、クローディアに気づかれる。即座に昨日の一部を話すが、隠していることはバレバレである。

ただ、深くは追及されなかったので書類を受け取って寮に戻り、用事のために学園を出る。感情が表に出る理由を知っているのは恐らく一人だけ。唯一、同僚のロミオにだけは趣味から勘づかれている可能性がある程度だ。

(シルヴィ、元気でいてくれて良かった。)

そう思いながら、昨日のことを歩きながら思い返す。

「ところで、なんで敬語なの？たぶん、同じ年と思うけど」

「今年で16歳ですから合ってますよ。敬語は、女性との会話だところなるんですよ。慣れると消えるんですが……」

互いの自己紹介も終わると、シルヴィアからそんなことを聞かれる。同級生以下の同性なら最初からため口なのだが、女性や目上に対しては敬語になりやすい。クローディアに関しては、会った日のため口でいいと言われている。それを知った直後、ロミオから徹底的に釘を刺されたが。

「敬語は無くてもいいよ。固くなっちゃうし、私も気にしないから」

「……分かった。多少きこちなくなると思うが、よろしく頼む」

そう話していると、料理が運ばれてくる。日替わりメニューはハンバーガーらしく、鉄板の上から良い匂いが漂う。また、ほぼ同時にカルボナーラも到着し、こちらも出来立てのミートソースが食欲をそそる。

「おおっ！どっちも美味そうだな」

「でしょ！どのメニューも美味しそうだから、いつも迷っちゃうんだよね」

そう言つて同時に『いただきます！』というと、お互いに料理へ手を付ける。その匂いに違わずとても美味しく、俺は一心不乱に食べ進めていた。そして、気づく頃には半分以上食べ終わっていた。

その間、シルヴィアもカルボナーラを食べながら、につこりと笑つて見ていた。

「はっ！つい夢中で食っちゃまった」

「ふふっ。気に入つてくれた？紹介した甲斐があつてよかった」

後半は味わつて食べていたため、2人の食べ終わりはほぼ同時だった。デザートはバニラアイスを食べで一息ついていっていると、今度は俺がシルヴィアに質問する。

「ところで、あんな路地裏に？昼間の明るい時間とはいえ、女性が一人で歩く場所じゃない」

言えないなら構わないけど、と付け加えながら質問する龍弥。世界のどこでも、ああいった薄暗い場所には一癖、二癖ある者が集まりやすい。来て初日とはいえ、アスタリスクでも当てはまると知れたのは良かったと思うことにする。

「流石に不思議に思うよね。まあ、端的に言う人と人探しかな」

「……^{ストレガ}魔女が？ いや、逆だな。だいたいこの位置までしか探せなかったから、歩いてるわけか」

「うん。アスタリスクにいることは分かったんだけどね」

シルヴィア・リユーネハイムの能力。それは、歌を媒介にしたイメージの変化だ。つまり、曲に込められたイメージを実際の現象として操ることができる。恐らく、多彩さでは魔女の中でも一線を画すだろう。

一極型と比べても僅かに劣る程度のため、その精度でも見つからないとなると目視による搜索程度しかできない。

「そっか、見つかるといいな。じゃあ、そのペンダントも贈り物か？」

そう言ってシルヴィアの首にかかるペンダントを見る。銀メッキのロケットペンダントだが、輝きから綺麗に手入れをされているのが分かる。

「ちよつと違うかな。これは、幼馴染からのプレゼント。いつ再会できるか分からないけど、必ず会えるって信じてるから」

そう言いつつ、ペンダントを両手で握りしめる。それを見て、俺は「そっか」と返すことで精一杯だった。下手な事を言うのは無粋というのもあるが、心当たりがあり過ぎる。

「さて、そろそろお開きにしますか。お互いに戻った方が良さそうだ」

外を見ると、道を街灯が照らし始めていた。門限まではまだ余裕があるが、わざわざギリギリに行くこともないだろう。

「もうこんな時間かー、あつという間に過ぎちゃったね。改めて、助けてくれてありがとう」

「どういたしまして。こちらこそ、色々話せて楽しかったよ。つと、そうだ」

互いに席を立ちながら挨拶を交わすと、名前を書いた紙ナプキンにアドレスを書いてシルヴィアに手渡す。

「お近づきの印つてことで。携帯端末でもいいんだが、足を消しやすいに越したことはないからな」

「……ふふっ。気遣ってくれてありがと。でも、使う時は遠慮なく使うからね？」

「覚悟の上だ。俺にできることなら、大抵やってやる」

胸を叩きながらとんでもない宣言をする。なお、個人的に結構マジで言っていたりする。

その後、シルヴィアをクインヴェールの校門が見えるあたりまで送っていき、俺は男子寮の自室に戻った。買った物を配置した後、同僚達に連絡を取って近々会いに行くことを伝えた。

ただ、1人だけ明日時間を空けて貰えるか聞いたところ、了承を得られたのでメールで改めてアポを取っておいた。

ちなみに、連絡を取った時にさっそくロミオが今日のことを追及しようとしたのだが、

『後でやれ（やって・やって下さい）！』

と他の奴らに満場一致で釘を刺されて後回しになった。結局、色々伝えあった後に事細かく説明する羽目になり、かなり面倒な目にもあった。

（ロミオの奴、毎回思うが何で界龍に入ったんだよ）

当時でもかなり迷っていたのだが、強くなりたいという本人の意向で界龍に行くこと

を決意したのは全員が知るところなのだが、今の状況を鑑みると意地でも星導館に行かせるべきだったと後悔している。

さて、回想しつつ向かっている先は、アルルカント・アカデミーである。俺達の部隊が解体された時、1人ずつ各学園に配属されることになっていた。その時、武器開発に興味があった同僚が責任者と共にアルルカントに行つた。今日はちよつと頼みがあつたために先に連絡を取つたのだ。

返信されたメールに書かれた場所で待っていると、紫のジャケットに同色の帽子を被つた青年がやつて来た。セミロングの髪に緑の瞳、傷痕があるものの整つた顔に高身長も相まつて魅力の1つになっている。

「相変わらずみたいだな、ギル。武器のPRにも引つ張り出されてるって?」

「ナナにでも聞いたか? 晒されるのは好きじゃないんだが、しつこく頼まれてな」

ギルバート・マクレイン。元同僚で、現在はアルルカントの高校3年生である。部隊で最年長だったため、大半が中学校入学に対しギルバートは高校に進んだ。ちなみに責任者の推薦で大学への入学も確定している。

「で、俺にだけ先に会うってことは、何か用事か?」

「ああ、こいつのチェックを頼みたい。一応、手入れ自体はしていたが、今の内に点検しておきたい」

「つたく、世話が焼ける。博士は今外出中だ。俺が見ても構わないな？」
 「ああ、問題ない。助手のお手並み、見せてもらおうか」

左手を動かしながら答えると、「るせえ」とぶつきらばうに返しつつそのまま歩き始める。無愛想だが頼れる兄貴分という感じは、全く変わってないようだ。

無言で歩くこと数分、アルルカントの一角にある研究室に入る。机には複雑な計算式が書かれた紙が散乱しており、試作品であろう兵器が置かれている。正直、素人には危な過ぎる部屋である。

「んじゃ、そこに座って左腕を機器に通せ。で、腕を外せ」

言われた通り、作業台の横にある椅子に座って左腕を機器に通して固定。そして、脇と二の腕の境にあるスイッチを押すと、パシユンという音と共に腕が離れる。それと同じに、擬態していた腕が本来の金属光沢を持つ黒に変わる。腕には青いラインが描かれ、手の甲にはウルム・マナダイトが青々と輝いている。

「自動修復するとはいえ、一応手入れはしていたようだな。劣化している部品はない」
 「そりゃ良かった。《神喰の御腕》ウロボロス・マニターを本格的にいじれるのは博士とあんたくらいだからな」

実は、俺の左腕は純星煌式武装だ。入手経路は長くなるのでいざれ話すとして、これが無ければ俺は生きてはいないだろう。

そして、俺という完全適合者がいたからこそ部隊ができたと言える。俺をオリジナルとして、それまで実験で生き残った5人に《神喰の御腕》の劣化コピーした煌式武装——フレター・ウエボン神喰武装が与えられた。俺達のいた部隊、統合企業財体特殊事件対策部隊——別称ブラッド隊の誕生である。

責任者の博士が人格者だったためにまともな生活（血生臭い部隊だったが）を過ごせたのは、幸いとしか言いようがない。

「チエック完了。問題なしだ」

「サンキュー。で、報酬に何をすればいい?」

メンテナンスが終わった後、見返りに何かするのは部隊の時から慣例である。なお、博士の時は大抵実験台になる（少なくとも命に関わることはない）ため、ナナが和菓子や、ロミオが浴衣を渡している姿が目撃された。ギルが担当し始めたのは部隊の解散する直前だったが、被害が少なかったために重宝されていた。

「なら、ちよつと付き合え」

そう言うと、ギルバートは右手に黒い腕輪を付け、神喰武装の槍——チャージスピアを手にとって研究室を移動する。ついていくと、アルルカントの訓練場である。研究職が多いとはいえ武器の検証も兼ねて行うことが多いので、空くことは少ないと思うのだが。

「《冒頭ペーの十二人ジ・ワン》の特権か」

「まあな。実力で得られる特権は、持っておいて損はない。特にここじゃ、重要視されてなくても融通が利く。外部用のカメラは切っておくから心配ない」

アルルカントでは、研究者の発言力が強いために序列制度があまり重要視されていない。しかし、ギルバートの場合は研究者かつ《冒頭ペーの十二人ジ・ワン》である点を生かして、特権を用いているのだ。成果主義を貫くここでは、自分が勝つことが成果の証明となるのだから効果覲面だろう。

「で、ここに來るってことは……」

「察してゐるんだろ？ 運用試験のついでに訓練に付き合え。久々に体を動かしたいからな」

やっぱりかと思ひながら反対側に歩く。ある程度距離を取ると、《神喰の御腕》が起動して両手首に赤い腕輪が巻き付き、双剣——バイティングエツジを構える。開始合図の設定を終えたギルバートもまた、チャージスピアを構える。バイティングエツジは薙刃形態のため、初手は長物同士の戦いである。

そして、開始のブザーが鳴った瞬間、

「!!!」

互いに正面に向かって突撃する。俺は激突する瞬間に刃で槍の先を跳ね上げると、そ

れを見越していたギルバートが蹴りで自身に迫る反対の刃を蹴り上げ、そのままバク宙で距離を取る。ギルバートの着地する瞬間を狙い、即座にバイティングエッジを二刀流形態に分離して一本を投擲、俺自身も体勢を整えるために下がる。

投擲された剣に気づき、ギルバートは即座にチャージスピアを叩き付けて落下時間を調整して着地する。俺はその時間を使って右手の剣を拳銃形態に変えてそのまま狙い撃つ。

普通ならば銃形態は両手持ちの銃なのだが、取り回しやすさの改造依頼した結果、俺だけ2丁拳銃になっている。

ギルバートは横に水平移動することで弾幕を回避。途中からスライディングで接近して横薙ぎにチャージスピアを振るうが、俺はバク転で回避しつつ、投擲した剣を回収する。

「変わらないの身体能力に加えて、可変機構も完全に使いこなしてるな」

「こんなものはただの技術だ。時間さえかければ誰だつてできる」

「なわけあるか。そもそも、お前みたいになる前に息絶える」

互いに軽口を言い合いながら、俺はもう片方の剣も拳銃に変えて相対する。すると、ギルバートはチャージスピアを片手にクラウチングスタートのような構えを取る。明らかに突進の構えだ。しかし、突進までのチャージ中は無防備になるため、個人で打つ

には隙だらけ。一応星辰力での防御はできるが、微々たるものである。

それを選ぶ以上何かあると警戒心を強めていると、いきなりギルバートがチャージなしで突進してくる。反射的に拳銃を打ち放つ。

と、次の瞬間にチャージスピアからシールドが展開され、銃撃をガードしてそのまま突っ込んで来た。左右に避けようにも、追撃されれば隙だらけである。

「ちっ!？」

俺は即座に拳銃から二刀流形態に切り替え、床に剣を叩きつけて飛び上がって回避する。できれば薙刃形態で飛び越えたかったが、速過ぎて間に合わなかったのだ。

しかも、ギルバートの攻撃はそれだけに止まらなかつた。突進中にチャージを終えていたのか、星辰力が吹き荒れる。それを視界の端に捉えた瞬間、俺のバイティングエツジが赤いエネルギーを纏うと青く輝き始める。

そして、2人の技が激突する。

「クリムゾン・グライド!!」

「ダイブ・トウ・ブルー!!」

ギルバートの赤黒いエネルギーを纏った突進と、俺の青い2本の剣による振り下ろしがぶつかり、互いに弾き飛ばされる。

俺はバク宙しながら拳銃形態に切り替え、ギルバートに向けて銃撃する。すると、ギ

ルバートの手にはいつの間にか弓が握られており、すでに矢を放っていた。

そして、放たれた矢は途中で黒い龍——アラガミに姿を変え、銃撃を捕食。光の玉となってギルバートに取り込まれていった。

その現象と行われたことの予想に、思わず「マジか」という言葉が出る。

「流石に驚いたか。これが研究の成果だ」

「驚くなつて方が無理だ。捕食形態を飛ばして攻撃を無力化し、そのままバースト化つて」

《神喰の御腕》で創られた武器は銃・近接武器・盾・捕食の4形態を持つ。中でも捕食形態は、食べた物質をエネルギーに変換。バースト化という限定強化と、食べた物に応じた弾丸を得ることができる。なお上記の能力は神喰武装にしっかりと引き継がれている。

しかし、捕食形態は近接武器からしか変化できないため、当時は作戦行動開始前に廃材を捕食してバースト化し、強化中にできる限り制圧。その後の強化は各々に任せていた。（前衛役は戦闘中にバースト化していた）

「これが俺の新しい手札だ。さて、まだまだ戦闘データが欲しいからな。再開させてもらうぞ」

「上等だ。かかってこい」

そう言つてバースト化したギルバートと俺は戦闘再開。終了時間限界まで戦つてい

た。

なお、ほぼ強化しっぱなしのギルバート相手に長時間戦闘は流石に厳しかったため、終盤で俺も切札の強化を使った。

その時に原理を聞いたギルバートから、

「それを実行するとか、本当の馬鹿か」と言われた。

その後、強化の反動のためになんとか帰宅した後は翌日の昼まで部屋で寝込み、残り3日間である程度生活できる環境と習慣を整えた。

そして、今日。星導館学園の始業式を迎え、俺はこの生徒になる。

第3話

「というわけで、転入生の神薙龍弥君だ。仲良くしてやってくれ！」

「神薙龍弥だ。人によつては4年間の付き合いになるが、よろしく頼む」

若い男性教師——藤木浩太に軽い口調で促されて挨拶する俺。少々無愛想なものになつてしまつたが、感覚としては悪くはない程度と云つたところか。

「さて、皆のことだから、さつさと終わつて噂の姫様転入生を見に行きたいだろう。正直、俺も終わつて帰りたい。だが、龍弥をこのまま放置するのは流石に可哀そうだ」

あつさり本音を漏らすあたり、とんでもなくフランクな先生である。しかし、しつかり生徒のことを考えている。清濁併せ？みつつ、教師と生徒の両方から信頼されるタイプと見た。まあ、可哀そうという点はお節介とも思うのだが。

「そこで、だ。連絡事項はプリントに纏めてきたから後で配るとして、余つた時間で質問タイムだ。今の内に聞きたいことを片っ端から聞いちまえ！」

へっ!?と思つたつかの間、一齐に手が上がる。この教師にしてこの生徒ありのクラスのような。浩太を見ると、お前が当てると言わんばかりに親指を向ける。しようがないので名簿から適当に当てていくことにする。

「4年間ってなんで？もう高等部に入学決定してるとか？」「正解。編入試験に合格して
るから高校入学も決定済みだ」

「なら、そのまま高等部にいけばいいんじゃないか？」「恥ずかしい話だが、訳ありで学
校に行けてなくてな。経歴に義務教育がないのは流石に拙い」

「ぶっちゃけ強い？」「一応、場慣れはしてる。程度は分らんが、そこいらの不良には
負けねえ」

「趣味は？」「鍛錬と料理。料理は素人だから精進している最中だ」

その他、質問を片っ端から答えていく。結局、全員1つ以上の質問に答えた後に連絡
事項のプリントを貰って自由解散となった。しかし、誰一人として帰らずに他のクラス
へ向かって行く。

近くの生徒に聞いてみると、面白そうに教えてくれた。

なんでも、他国のお姫様が同年代に転入して来たらしく、一目見ておこうと一つの教
室に群がっているらしい。

確かに話題性は抜群だろう。しかし、ここまで人が多いと逆に迷惑ではないかと思
う。まあ、俺としては他のクラスから質問攻めにあわずに済んでいるのでラッキーと思
うことにする。

しかし、興味がなくはない。ちょうど昇降口を通るルートなので、一目見るために歩

いていく。

到着すると、その教室には人でごった返していた。興味深々なのは分かるし予想はしていたが、これほどとは予想外だった。

隙間から容姿を見ると、真っ先に赤い髪が目に入る。碧眼の瞳や通った鼻筋など、かなり整った容姿をしている。

その目からはかなりの自信と、それ以上の覚悟が見て取れた。まるで、遙か彼方にあ
る目標にのみを見据えているような。

(挑発にのる程度の輩は敵わない。壁として立ちはだかる敵でも食らいつきそうだな)

そう考えると、さっさと退散する。あの目からは、強い覚悟と同時に余裕ない感情も
見えた。おそらく、これ以上しつこいと爆発するだろう。破裂が分かっている風船に近
づくバカはいない。

俺が離れた直後、教室から女性の怒号が響いて来た。やっぱりな。

教室での暴発を逃れた俺は、商業エリアにいる。しかし、買い物という訳ではない。「さて、とりあえず来てみたが、面白そうなバイトはあるかな」

小遣い稼ぎのバイトを探すためである。学費等の学校に通うための費用はすでに支払われているが、生活費は個人持ちのため、自由に使える金はそう多くない。とは言っても、前の部隊での給料が段違いに良かった（財体の組織＋危険度が高すぎるため）ので、捻出できなくてもないが、多いに越したことはない。そのため、バイトの種類は関係なく何かしらの技術が身に付く職ならいいと考えている。

え、中学生だって？今年16歳だから法的には問題ない。

という訳で、掲示板等を使って探して見るのだが、

「何気に用心棒系のバイトが多いな。まあ、星脈世代が集まった都市らしい。まあ、見つかからない場合の最終手段だな」

全体的に短期系が大半を占めており、少ない長期系は単純作業のバイトばかりである。選り好みする気はないが、時々、地雷（ヤバイ）バイトが混じっているために警戒もしている。

結局、掲示板では見つからずに店舗の張り紙の求人を探して見るも、良さそうなバイトが見つからずに昼を過ぎてしまう。

（まあ、焦る必要はないか。昼食はどこにするかな）

そんなことを考えながらフラフラと歩いていると、

「ひゃっ!」

という声が響く。その方を見ると、大量のチラシが紙吹雪のように舞い上がり、こちらに向かつて飛んで来ていた。

瞬間、目の前から流れてくるチラシの波がスロー再生に映る。紙の飛ぶ向きや位置を即座に把握すると、必要最小限の動きでチラシを回収していく。ステップやジャンプを組み合わせて、両手の指を総動員して、腕に引つ掛け顎に挟んで束ねていく。

光景が元に戻ると大半のチラシが手元にあり、動きを見ていた周囲の人から拍手が起こった。

「ほら、大丈夫か?」

「は、はい!大丈夫です、ありがとうございます!」

チラシの束を受け取りながら頭を下げてくるのは、メイド服を着た少女だった。小柄で幼い顔立ちをしており、グレーの髪も相まって可愛らしい女の子である。

チラシを渡しつつ、そのまま貰った目を通す。女の子の服装から察していたが、喫茶店のようなのである。『Setaria』と書かれており、営業時間や簡易メニューなどが書かれている。地図の場所は、すぐ近くである。

「ピラ配りってことは、その従業員ってことだよな? オススメのメニューってあるか

「？」

「はい！店長の作るオムライスが一番オススメです！ぜひ食べてみて下さい！」

緊張しつつも笑顔で教える少女に、ありがとうと礼を言おうと、さつそく地図にある店に向かつてみる。これも何かの縁と思い、昼食もそこにすることにした。

「つとんか」

店の場所は交差点の角地で、カジュアルな雰囲気である。少し大通りから離れているが、十分に目立つ建物である。

店に入ると、昼を過ぎたために客足も疎らで、ちょうどいい時間に来たようだ。

「いらつしゃい。空いているお席にどうぞ」

カウンターにいる男性店員の声が響く。空いている席に座って備え付けのメニューを見る。とは言っても、メインに何を頼むかは決めているので、何があるのかの物色に近い。

「すみませーん」

「はい」

とゆつたりとした声が聞こえ、白髪のエイトレスが来る。外でチラシ配りをしてくれている子のメイド服と色合いや形が違うが、各個人で違うのだろうか。

「オムライス大盛りにコーヒーを頼む。時間がかかるならコーヒーを先に」

「分かりました。マスター、オムライスとコーヒーです」

そう言つてカウンターから調理場に走つていく。何となく和みながら、店内を改めて見回す。

かなり落ち着いた雰囲気、外から来た人が過ごしやすい装飾になっている。従業員同士の仲も、見た所良好なようだった。ただ、男性がマスターだけという点が気にはなつたが。

そんなことを考えていると、裏から元気な声が響き渡つた。

「ただいまー！買い出し行つてきたよー！」

新人なのか、性格か。明るい声からは、職場での居心地がいいようなイメージがこれでもかと伝わってくる。正直、これくらい良い雰囲気働きたいと思つた。

店内の観察を終えて、貰つた連絡事項に目を通して、出来立てのオムライスが運ばれてきた。持つてきたのは先程の人ではなく、亜麻髪のウエイトレスである。見た目からして快活そうであり、先程の買い出しの声も彼女だなどと察せられた。

「お待たせしました！オムライスとコーヒーですー。こゆつくりどうぞー」

元氣澆刺を体現したかのような接客に、まるでなんらかのオーラが振り撒かれているようにも見える。オムライスはケチャップではなく、デミグラスソースのようだ。

受け取つたオムライスを食べると、進められるのが分かるように美味しい。卵は半熟、

チキンライスも均等に混ぜられ、ソースも良く絡み合う。

一緒に頼んだコーヒーも香りが良く、試しにブラックで飲んでみると、苦みも少ないように感じる。ミルクと砂糖を少量入れると、苦みを抑えつつより美味くなった気がする。

オムライスを早々に食べ終え、携帯端末でニュースを見ながらコーヒーを飲み終える。と、1時間もいた。それほどまでに居心地良く入れたことに自分でも驚いた。しかも、気分が落ち込んでいる訳でもなかったのだが、かなりリフレッシュできたような不思議な感じがした。

そろそろ店を出ようと会計に向かうと、先程チラシ配りをしていた少女が入ってきた。

「ああ、さっきの……。」

「あ、先程はありがとうございました！」

「おっ？なんだ千絵莉、知り合いか？」

軽く頭を下げると、少女の方は深々と頭を下げる。今は自分しか客がないため、少女の行動に他の従業員が食いつく。揉みくちやにされているのを横目に、男性店員に会計を頼む。

「騒がしくて申し訳ありません。客が少ないと気が緩むようで……」

「いえいえ。明るい女性のはしゃぐ姿は、それだけで絵になりますから。……バイト募集してないのが残念だな」

お釣りを受け取りながら出た眩きは、殆ど無意識に出た上にかなり小さかったため、そのまま流されると思っていた。

しかし、目の前の男性店員には聞こえていたようで、一瞬眼光が鋭くなった気がした。

「ふむ。君、料理の経験はあるかい?」

「? 自炊程度ならできますが……」

「接客やコミュニケーションは?」

「分かりません。応対できなくはない程度ですね」

「腕っぷしのほどは?」

「そこらの暴徒なら、その場で伸せます」

そう答えると男性店員は自分の体を眺める。痩せて見えるであろう俺の肉体は、圧縮された柔軟な筋肉の塊である。ここに来る前に学んだ技術と相まって、制限付きでも体重と身長が倍くらいの相手なら一撃で吹っ飛ばせる。

男性店員は顎に手を当てて考えると、不意にこんなことを言い出した。

「……君、ここでバイトしない?」

「……へっ?」「えっ?!」「何っ?!」「んっ?!」「ふえっ?!」

最初は俺。次に千絵莉ちゃんと食いついた店員。最後にオムライスとコーヒーを持ってきた店員。それぞれがバラバラの反応をする。しかし、全員に共通して驚愕の感情が混ざっている。

「おいおい店長!?!いきなり何言ってるんだ!?!」

「何って、言った通りだが? 何か問題でも?」

「問題しかないだろ! 行きずりの客を勧誘する奴があるか!?!」

真つ先に復活した店員が男性店員——店長に詰め寄る。見ず知らずの客を勧誘すれば、普通の反応である。しかし、今度は俺が驚く番だった。

「いや、千絵梨ちゃんを助けてくれたから悪い人じゃないだろうし。今の返答から最低限の技量はある。それに君、バイト探してたんでは? 声に出てたよ」

たったそれだけで自分を勧誘したのか。度胸があるのか行き当たりばったりなのか。はたまたま唯の御人好きか。

「まあ、突然だったのは認めるよ。できれば1週間以内に返事が欲しいね」
「で、本音は?」

「男一人がそろそろ寂しくなったから、意欲ある男性店員が欲しい」

「(こ)まで正直ですと、清々しいですね」

「やっつてゐることは滅茶苦茶ですけどね」

店長の本音に、笑う2人とジト目の2人。そんな状況を見ながら俺は考える。

喫茶店のメリットは、料理とコミュニケーション能力である。前者は日常生活でも有効活用でき、後者は今後人と話す機会が増えた際に役立つ。

デメリットは祭り事への参加が少なくなることだが、そちらは代休などでカバーできるはず。

「……星武祭やらで時々抜けることになりましたが、いいですか？」

「「「えっ?」」」

「事前に連絡してくれるなら大丈夫だけどって、え、マジ?」

真面目に考えて返答したら何故か驚かれた。誘ったのはそつちだろうに。

「いや、ごめん。本当に受けてくれるとは思わなくて」

「自分で誘つといて言いますか。こちらとしても、デメリットが日時のやり取りだけですからね。それさえ通じれば受けますよ」

そう言うのと店長は納得するが、残りの従業員はついていけずに唾然となる。

「んじや、とりあえず採寸だけ済ませようか。自己紹介もついでにやろう」

「俺は構わないが、店の方は大丈夫か？」

「心配いらないよ。平日のこの時間帯は、客足が一気に遠のくからね」

「「「待て待て待て待て!!」」」

何とか再起動したのか、全員から静止される。突然の勧誘をまさか受ける人がいるとは思わなかったのだろう。

「いや、おま、マジで受ける気か!？」

「さ、流石に擁護できません」

「冗談と思つてノリノリだったけど……、本気？」

「あ、あはは。同じくです」

そんな反応になるのも頷ける。というか、これが普通の対応である。

「ま、一種の社会勉強だ。いずれするなら早い方がいいし、自分で決めたいからな」

「これは行き当たりばったり過ぎだろ！」

「……なんか面白くなってきたな」

「言うなよ! やつてる方が悲しくなってくるだろ!？」

ツツコミが的確すぎて逆に楽しくなってくると、その子が涙目になっていったので流石に自粛する。

「さて、ちようど全員復活したから、ついでに自己紹介。俺は城川柚希だ。ようこそ、喫

茶『Setaria』へ」

「つたく。あー、あたしは舞羽ナナ。色々あったが、よろしくな」

「御園苺華です。よろしくお願ひしますね」

「天宮あまみやみくりですーす！これからよろしくね！」

「雪村ゆきむら千絵梨です。よろしくお願ひします」

「星導館学院の神薙龍弥だ。今日入学したばかりだが、よろしく頼む」

そんなわけで、あれよあれよという間にバイトが決まり、俺のアスタリスクでの学生生活が本格的に始まるうとしていた。

閑話 龍弥の新生活

「さて、無事に星導館学園に入学した神薙龍弥。今回は、そんな彼の1日を覗いていくとしよう」

5時 起床

「うゝ、あゝ」

赤いベッドから出ながら、血生臭くなっている赤いパジャマを洗濯機に放り込み、トレーニング用ジャージに着替える。玄関に向かう前にキッチンでお湯を沸けるようにタイマーを設定すると、運動用シューズを履いて部屋から出て、近くの池に向かう。

ここから池までは結構遠いが、全力疾走すればすぐに着く。速さで風圧の被害も来るが、この時間帯だと全く人がいないので問題ない。

池の草木の影で水着になり、こっそり池に飛び込む。服はアラガミを出して捕食する。

オリジナル特有の能力か、神喰の御腕にて捕食した物品は内部で保存できるのである。ゲームでいうアイテムボックスと言えば分かりやすいだろう。なお、内部に入っている物は確認でき、捕食形態に手をつ突っ込んで取り出せる。

この池は人工池なので、バランスを取るためのバラストエリアと繋がっている。素潜りの要領でバラストエリアに向かって泳いでいき、一本だけ欠けた柱の上に身を乗り出す。

なぜ、バラストエリアのこんな場所を知っているかというと、準備期間中に欠けた柱を探し当てたからだ。普通なら検査で直される筈だが、何故か欠けたままのため、ありがたく訓練に活用させて貰っている。

「はー、はー。……さて、始めるか」

両手にバイティングエッジを出し、アラガミから両手両足に重り替わりの腕輪を付け、もう一度水の中に潜る。この腕輪は、ブラッド時代に訓練用にギルと博士が開発したもので、自由に重さを調整できる。

腕輪は最重量で調整したため、当然バラストエリアの底に落ちる。そして、その状態で立ち上がって素振りを行う。水中による水圧と無呼吸運動、動きにくい環境での慣れ

も兼ねた訓練である。

その他、欠けた柱の上での素振りや腕立て伏せなど、一般的に行われるトレーニングを行う。

7時30分 朝食＋出発

訓練を終えて部屋に戻ると、乾燥させた衣類を回収してシャワーを浴びてそのまま身だしなみを整える。

沸いたお湯でコーヒーを入れながらトーストを作りつつ、できるまでの間に昨晚の残り物を弁当に詰める。

コポポポ。 チンツ！

(うん。 いい匂いと焼き具合だ)

『Setaria』で学んだ美味いコーヒーの淹れ方や、トーストの焼き色を見る。 こういう点で、料理系のバイトを始めて良かったと思う。

トースト朝食を取りつつネット新聞を読む。登校時間間に合うタイピングで準備してある鞆を片手に寮を出る。一見普通の学生と変わらないが、教科書等は電子書籍のために鞆の中身は軽い。

8時15分 学校到着

「おはよー」

「おはよう」

挨拶に應對しながら、頬杖を突いて教科書を流し読みする。中学までの基礎学力は独学で何とかあったが、落星工学などの専門分野を学ぶのは不可能のために、ある程度復習と予習をしている。

「龍弥ー。ちよつとここ教えてくれね？次のテストでいい点取らねえと生活費削られるからさー」

「何でそんなギリギリまで放置するんだよ……」

クラスとの関係は、まあまあいい具合である。『高校まで確定＝賢い』という図式が早々に作られ、勉強を教えて欲しいと言われるようになった。俺個人としても良い時間潰しになるので、ちよつどいい。

「さーて、みんな席に着けー」

藤木先生の声と共に朝礼を行い、その日の授業が始まる。

12時 昼休み

「いただきます」

購買に買いに走る男子を見ながら弁当を開ける。親の手伝いで見た調理法を、見様見真似と味見で作った料理だが、食える味にはなっている。なお、初見の料理はちゃんとし、レシピ通り作った。

「おっ！美味そう！」

その声と共におかずの唐揚げが一つ消える。視線を追うと、購買から戻った後ろの席の男子である。

「おいおい……。せめて一声かけろよ」

「わりい。あまりに美味そうだったもんで」

平謝りだが、文句を言わない所を見ると味付けは上々のようだなによりだ。少なくとも、自分の味覚がイカれてはいないと分かる。

「しっかし、俺は仕送り貰えるが、お前は自分でやり繰りしてんだろ？大変だなく」
「いや、案外そうでもない。長期を見据えた金の使い方は節約を徹底すれば何とかなるし、自炊も慣れれば楽しいもんだ」

昼食が終わればまた時間が空くので、適当な談笑である。ある意味一番学生らしい時間と言えるだろう。

16時半 授業終了+アルバイト

授業が終わって皆がバラバラに帰る中、俺は『Setaria』に向かう。

「龍弥さん、こんにちは」

「こんにちは、千絵梨さん」

ちょうど同時刻に終わる千絵梨と途中で合流して2人で店内に入る。中ではナナとみくりが一足先に準備をしていた。なお、千絵梨はクインヴェール女学園の中学3年生である。

「おはようございます」

「おはよー。」こっちはもう終わるから、仕込みの手伝いお願いね」

「あ、ついでにこれ戻しといてくれ」

ナナから受け取った除菌スプレーと雑巾を仕舞いながら、制服に着替える。驚くことに仕立てたのは母華だという。曰く、趣味が転じてこうなったらしい。

「こんにちわー。店長、どこまで終わってますー?」

「野菜の下準備がそろそろ切れる。そっち頼んだ!」

了解と返事してすぐに作業に入る。元々刃物（正確には刀剣の類）の扱いに長けてい

るため、包丁を手足のように操って皮や芯を切り取っていく。皮がすべて繋がった状態で剥かれ、空中でバラバラにしつつ分けられる様子は圧巻らしく、ここで初めて見せた時にドン引きされた。

曲芸のような作業が素早く行われた結果、そこそこ大きめのダンボールに入っていた野菜が、あつという間に処理される。野菜の下準備は、基本新人が刃物の扱いに慣れる修行だが、俺の場合は忙しい時のヘルプ扱いになっている。

「相変わらずの包丁捌きだな。ここじゃなくても良かったんじゃないか？」

「他じゃ、飼いきりにされるのがオチに思いますけどね。街頭パフォーマンスなら一儲けできそうですけど」

そんなもんかね？と店長と軽口をたたき合う。最初こそ敬語だったが、本人が面倒とばつさり言ったため、店以外ではこんな感じである。

で、諸々の準備を終えてディナータイムになると、一気に忙しくなる。

「オムライスとカレーお願いしまーす！」

「デザートのカーキもお願いです」

「ハンバーグできました！カレーと一緒にお願いします！」

「プリンがすぐにできつから、カーキはちよつと待つてくれ！」

何度か対応して慣れつつあるとはいえ、ディナータイムの混雑具合はとんでもなく忙

しい。これで前よりはマシらしいのだから、いろんな意味で恐ろしい。

今日は下準備が間に合ったことで、閉店まで逃げ切ることができた。

「今日もお疲れ様！今日は新レシピの試食も兼ねた夕食だ。味は保証するが、忌憚ない感想を頼む」

そう言っ出てきたのはポトフである。春野菜が多く入っており、しっかりと煮てあるため程よく柔らかかく、スープも出汁が効いている。個人的には十分に美味しいのだが……。

「美味しいけど、ケチャップ足した方がポトフらしくないか？」

「ちよつと塩分が多く……いや、入れる塩を減らせば」

「いつそトマト入れては？酸味があつていいと思いますけど」

「そうすると、味がぶつからないように気を付けないとですね」

「それ以上はもつと試さないと分からないじゃない？まだ、試作品なんですよ？」

「まあ、試行回数を増やすのは分かる。後は」

と、こんな感じで食べながら批評し、時間が流れていく。

21時 帰宅

中等部側の門は夕方で閉まるため、高等部側の門から走って寮に戻る。鞆をベッドに立て掛け、アラガミの口からマットを取り出して設置。服を洗濯機に放り込んで起動し、全裸でマットの上に立つ。

そして、左手でバイティングエッジの捕食形態を展開すると、

『GOOOOOOWAAAAAAA!!!』

巨大な口が右腕を捕食する。通常なら凄まじい激痛が走つてのたうち回るだろうが、神喰の御腕の代償と4年以上続いた慣れが、一切の変化を表さない。

瞬間、血が噴き出す前に筋肉の右腕が生え、動画の早回しのように皮膚が再生していく。

「今日の細胞の更新完了。シャワーにするか」

若干感覚の鈍い右腕をそのままに、シャワーを浴びに行く。

神喰の御腕の持つ能力は、捕食能力による所有者の改造。とは言っても、キメラのようになるのではなく、体を構成する細胞を強化する。単純に言うところ、『人の姿のまま、喰った物が効かなくなる能力』だ。

これだけ見ると、時間と入手に手間が掛かるが無敵の力が手に入ると思うだろう。しかし、そう簡単な話であるはずがない。そもそも、神喰の御腕は純星煌式武装のために代償がある。

まず根本的な問題として、必要とされる適合率が高すぎるのだ。星導館では適合率が80%を超えれば純星煌式武装を貸し出されるが、神喰の御腕は1000%まで計測可能で、最低でも100%を超えなければ内部のアラガミに捕食される。しかも、適合した瞬間に感情抑制の代償が発動し、表に感情が殆ど出なくなる。なお、この延長で痛覚もある程度鈍感する。

また、週一のペースで自分以上の性質を持つ何かを捕食する必要がある。これは先の能力と繋がっており、自分が持つていない耐性や力になる糧を吸収しなければならぬ。これを無視するとアラガミの捕食本能に侵食され、最終的には暴走して二度と自我を取り戻さなくなる。要は自分という意識が死ぬ。

さらに、神喰の御腕は所有者の体を改造するため、破壊されるまたは奪われた場合、その所有者は命を落とす。

その他代償はまだあるのだが、あまりにも命懸けの要素が多すぎるのだ。能力と代償の天秤があまりにも釣り合っておらず、いくら欲望に駆られていても逃げ出すだろう。

「ま、そんな純星煌式武装に文字通り選ばれた俺も大概可笑しいがな」

自重気味に言うのと、体を拭いてドライヤーで髪を乾かす。赤いパジャマに着替え、明日の弁当を仕込み、机で予復習を行う。終わる頃には洗濯が終わっているの、乾燥機にタイマーを付けておく。また、今朝回収した洗濯物はここで置く。

23時 就寝

一日のやることを終わると、さっさと就寝である。もし同僚から連絡が有ればこの時間だが、ここ最近は何々忙しいのかここにきてから全くない。

(おやすみ)

そう言つて目を閉じる。

「と言つたわけで、彼もしばらくは普通……とは言い難いが、学生生活を謳歌しているようだね。しかし、イベントや災いはいつも突然やつてくるもの。彼の望む平穏が手に入るのはまだまだ先のことだ。へっ？ そう言つてる僕は何者か？ んん、何者でもないのが正解なんだけど、強いて言うなら——」

——愛する者のために、
世界に抗い続けた英雄かな？